

定本

坂口安吾全集

第十一卷

宮城野矢全集

第十一卷

冬樹社

定本 坂口安吾全集 第十一卷

定価二〇〇〇円

昭和四十四年一月十日初版 第一刷発行

著 者 坂 口 安 吾

発行者 滝 泰 三

印刷所 三容堂印刷株式会社

東京都千代田区神田錦町二ノ二

製本所 加藤三代治製本所

東京都新宿区早稲田鶴巻町二二番地

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区九段南二の四の一四

電話東京(三三) 三四二一(大代表)

振替 東京七五七



定本

坂口安吾全集

第十一卷

監修

石川 淳

河上徹太郎

小林 秀雄

獅子 文六

編纂

奥野 健男

檀 一雄

平野 謙

福田 恆存

題字

石川 淳

第十一卷
目次

明治
開化

安吾捕物帖

し 舞踏会殺人事件

11

し 密室大犯罪

37

魔教の怪

63

し ああ無情

87

し 万引一家

113

血を見る真珠

139

し 石の下

165

し 時計館の秘密

201

覆面屋敷

225

冷笑鬼

253

稲妻は見たり

279

愚妖

307

幻の塔

337

ロツテナム美人術

355

赤毘

399

家族は六人・目が一ツ半

435

狼大明神

461

踊る時計

489

乞食男爵

517

トンビ男

551

解説

奥野健男

581

戦後批判としての捕物帖

尾崎秀樹

589

解説

関井光男

599

小

説

VIII

明治
開化

安
吾
捕
物
帖

全

読者への口上

この捕物帖はたいがい五段からできています。第一段は虎之介が海舟を訪ねて事件の説明にかかること。(但し、この段は省くことがあります) 第二段は事件の説明。第三は海舟が推理のこと。第四段は新十郎が犯人を見つけだすこと。第五段は海舟が負け惜しみを云うこと。以上のうち第二段がほぼ全体の六分の五をしめ、全部が六十枚なら、この段に五十枚、他は全部を合せても十枚ぐらいで、これが解決です。

捕物帖のことですから決して厳密な推理小説ではありませんが、捕物帖としては特に推理に重点をおき、一応第二段に推理のタネはそろえておきますから、お慰みに、推理しながら読んでいただいたら退屈のぎになるかも知れません。作者はそんなツモリでこの捕物帖をかいているのです。第三段の海舟が心眼を用いるところで本をふせて一服しながら推理することに願います。海舟は毎々七分通り失敗することになっていますが、今までの探偵小説では、偉い探偵の相棒にトンマな探偵が現れて大マチガイの推理をはたらかせてあんまりバカすぎたようです。よんでいる方でも、自分の推理が当たらないと、トンマな探偵氏と同じようなトンマに見えて自分がイヤになるのが通例ですが、海舟という明治きっての大頭脳が失敗するのですから、この捕物帖の読者は推理が狂っても、オレもマンザラでないかと一安心していただけるでしょう。そこでメダシ、メダシ、というのが、この捕物帖です。

皆さんのオヒマの折のお友達というようなお役に立てたらと考えて書いた捕物帖ですから、楽な気持ちで推理をしたのしみながら愛読をたまわれば幸甚です。

昭和二十八年二月二十六日

舞踏会殺人事件

氷川の海舟屋敷の黒板塀をくぐったのは神樂坂の剣術使い泉山虎之介。この男、時はもう明治十八九年という開化の時世であるが、酔っぱらうと、泉山虎之介タチバナの時安と見得を切って女中のホッペタをなめたがる悪癖がある。

虎之介は幼少のころ、海舟について剣術を習ったことがある。そのころの勝海舟はいって貧乏、まだ幕府には重用されず、剣術や蘭学などをメシの種にしていた。習うこと二三年、海舟が官について多忙になったので、山岡鐵舟にあずけられた。そのとき虎之介は今なら小学校四五年生ぐらいの子供、それからズツと山岡について剣術を学び、今は神樂坂で道場をひらいているが、あんまりはやらない。

虎之介は勝海舟邸の玄関で、簾のイスに腰を下して、頭をおさえて考えこんだ。これがこの男の変った癖で、心配事があって海舟屋敷を訪れる時には、玄関の簾イスに腰かけて、頭をかかえて今更のように考えこむ。そのせいで、簾イスは脚が外れそうになってグラグラしている。彼の図体が大きいからだ。

四五分もそうしてから、虎之介は思いきって立ち上った。

そこで訪いを通じる。女中がひっこんで、代って海舟付きのお側女中小糸が現れて、どうぞこちらへと案内に立つ。まず十二畳と六畳の客間があって、ここにはイス、テーブルが置いてある。旗本屋敷のころは、ここが正式の座敷だ。床に河

村清雄の竜の油絵がかかっている。この客間の次の小間が「海舟書屋」で元の書斎。南洲や甲東と屢々密話清話した歴史的な小部屋だ。これらを右に見て長廊下を五間ほど行くと、六畳と八畳の部屋が今の書斎である。三畳の茶室と土蔵がついている。

今日は幸い相客がなかった。海舟の身にこもる気品が発しているが、当人アグラをかいて、口はベランメーである。

「虎かい。どうだ。ちかごろ剣術使いは忙しいかエ」

「父母七名、どうやら飢えをしのいでおります」

「神樂坂に酔っぱらいの辻斬がでるそうナ。オメエに似ているという話だ」

「メッソウもない」

「婦人の首ッ玉にかじりついて頬ッペタをなめるものだから、神樂坂は夜の八時から婦人の通行がないそうナ。どうせなめて下さるなら隣の新十郎様にしてもらいたいと神樂坂の娘や新造が願をかけているそうだ。虎が首ッ玉にかじりつくのはコンニャク閻魔えんまが似合いだろうと按摩のオギンが大きに腹を立てていたぜ」

「汗顔の至りで、多少身に覚えがありますが、話ほどではないようデ。実は、その結城新十郎どののことで御前の御智略を拝借にあがりましたが」

「なにか事件があったかい」

「まことに天下の大事件で、新聞は記事差止め。密偵津々浦浦にとび、政府は目下御前会議をひらいております」

いつもながら虎之介の話は大きい、御前会議は例外だ。

海舟はフシギがって、

「どこかで戦争がはじまったか？」

「実は昨夜八時ごろ政商加納五兵衛が仮装舞踏会の席上何者かに殺害されました。当夜の会には閣僚はじめ各国の大公使、それに対馬典六、神田正彦も出席いたしておりました」

さすがの海舟も、神色自若たるものではあるが、口をつぐんで、ちょっと考えこんだ。天下稀代の頭脳、利剣の冴え、飛ぶ矢の早読み、顕微鏡的心眼であるが、事はまことに重大だ。

秘中の秘であるが、時の政府が国運を賭けて計画した難事業があった。当時の日本には、工業らしい工業がなかった。

たった年産千トンの鉄工場すらもないのである。十何年も前から汽車が走りだしたが、その機関車もいまだに海外から輸入している。文明の利器というものは、国内では全く造ることができない。文明国の仲間入りをするには工業を興さなければならぬし、それには先ず大製鉄所が必要だ。ところが、資本がない。日本の大ブルジョアは貿易とか海運とか、手っとり早くサヤのとれる事業には浮き身をやつすが、大資本を投下して設備をほどこし、技術の精華をあつめた上で長

年月の研究を重ねなければならないような大工業には見向きもしないのである。

時の政府はこれを変えて、文明国の仲間入りの手始めとして、まず大製鉄所をつくらうと決意した。資本がないから、X国から五百万ポンド借りたいと考えている。五百万ポンドといえど五千万ドル。今の相場なら三千億円ぐらいに当るといふ大金なのである。

ところが日本が大工業をおこすのを喜ばない国がある。Z国などがその代表だ。後日自分の市場を荒される怖れがあるからである。

そこで総理大臣（十八年十二月までは太政大臣と云った。

その前後がちょうどこの捕物の時期に当たっているので、官名を史実通りにハッキリかくと秘中の実が知れてしまう。そこで太政大臣をひっくりかえして、前後一様に総理大臣とよぶことにする。他にも、その一事によって秘中の史実が知れるという決定的な場合には実の名詞を使わず、今様の名詞を使いますから御承知下さい）は考えた。大製鉄所を国家の事業としてやると、国際的にうるさい。半官半民でも、おもしろくない。民間人にやらせる一手であるが、幸い志を同うする者に大政商加納五兵衛という者がいた。そこでこの男の個人事業としてやらせることになった。

とはいえ、これは表向きで、五百万ポンドの借金にして